

パスタロッチャー教育賞 受賞者紹介

学校法人 白根開善学校 校長
本吉修二氏

1931年、大阪市に生まれる。慶應義塾大学文学部において教育学を学んだ後、1960年、東京教育大学大学院を修了。私立大学協会等での勤務を経て、1965年、東邦大学専任講師となる。1978年、学校法人白根開善学校を創立するため、同大学教授の職を辞す。同年、自己の資産のすべてを投入し、また賛同者の寄付を得て、群馬県六合（くに）村 標高1,100mの山中に、全寮制中学校、白根開善学校中等部を開校、法人理事長兼びに中等部長（校長）となる。1979年、同じく全寮制の高等部、1988年、初等部を設置する。現在、約7万㎡の敷地に小、中、高等部の校舎、図書館、生徒寮、教職員宿舎のほか、工芸技術、陶芸、織染、情報教育等のための校舎が配置され、また学校林、学校スキー場等の野外活動施設も敷設されている。全寮制、中高一貫制で、非行、不登校、知的障害等、さまざまな子どもたちを受け入れ、小学生9人、中学生24人、高校生102人が教職員とともに学び暮らしている。

「人はみな善くなるうとしている」、これが本吉氏の信念であり、白根開善学校の教育理念である。つまり、どんな子どもでも悪くなろうとして悪くはない、悪くなっているとしたら彼らをそうさせている確かな理由があるはずで、それを見抜き改善し、善くなるうとする自主的な意志と意欲がわくのを待つこと、そしてその意志と意欲が着実に育つよう力を貸すこと、これこそが教育者の仕事なのである。

氏は、このような信念に基づいて、今日まで20年間一貫して、500人以上のさまざまな子どもたち

を励まし見守る教育を実践してきた。その中には、すべに意欲をなくした子ども、登校を拒否し自室に閉じこもる子ども、荒ぶり非行を繰り返す子ども、大人への不信をあからさまにする子ども、心身に何らかの障害をもつ子どもなど、困難な状況に置かれている多くの子どもたちがいたが、氏は彼らを立ち直らせ、彼ら自身が持っている「善さ」が育つよう援助し、彼ら自身も生きてきたのである。その成果は、さまざまな分野で活躍している卒業生たちが白根開善学校を「故郷」とし、折に触れて学校を訪れて、「自分たちの学校」の存続発展に力を惜まないことにも表れている。卒業生の一人は「僕の人生に転機をもたらしてくれたのは、裏切っても無償で与え続けてくれた校長の愛でした」と語っている。

このような特色ある本吉氏は、かつてパスタロッチャーは、彼の周りに集まった子どもたちとともに暮らした真の教育の精神を、まさにもつと継承するものである。かなりのはみ出し行為があっても、その子が善くなるうとし返すことを信じて、繰り返して子どもを迎えに行っている。孤児院から逃げ出した子どもをのぞき探しに行くパスタロッチャーの姿と重ね合わせることができると、また、下で子どもに出会うと、手撫でやりながら「賢く善い子になりたいと思っね」と声をかけたパスタロッチャーは、現在の氏の姿そのものである。

本吉氏の多大な功績は、今日の困難な教育状況の中で、揺るぎない信念をもって真摯な実践を積み重ね、「教育の原点」を体現されていることにある。ここに第6回パスタロッチャー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。